

他人事ではない世界の水不足



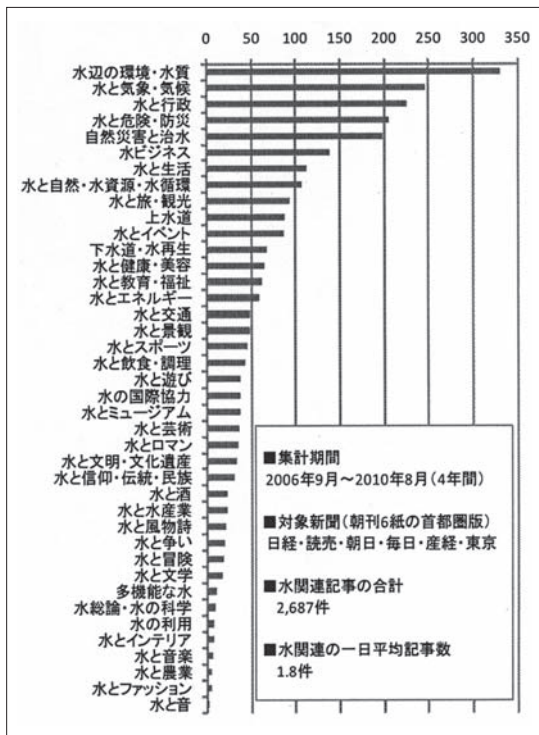
「水の web ライブラリ」 管理人 和田 彰

水道水，ボトル飲料，食事…毎日の暮らしで必ず口にする水ですが，この水がどこから運ばれてきたのかを考えたことはありますか？ 水が豊富な国と思われがちですが，実は水の大量輸入国でもある日本。そこで，私たちの日々の生活と世界の水不足との深い関係についてご紹介します。

私たちの暮らしと水との関わり

便利で安全な暮らしのなかでは空気のように当たり前の存在となっている水。私たちが水と関わらない日はありません。

日々の暮らしと水との関わりの一例として，過去4年間の主要な新聞での水に関する記事を整理した結果を表で示します。



新聞に登場した水関連記事の数と分類 (出典：http://water-news.seesaa.net/)

主な特徴としては，身近に触れあえる水である川や海など水辺におけるイベントや水質，生き物などの話題が数多く登場しています。続いては，地球温暖化に伴う気候変化が影響しているとされるゲリラ豪雨などの気象に関する記事，それに伴う防災対策や水災害に関わる話題などが，季節の変動はありますが継続的に登場しています。また，政権交代によるダム建設中止など河川・水行政の話題や，日本が培った水に関わる技術の国際展開を目的とした水ビジネスの記事などが，特に最近は増加傾向にあります。

こうしてみると，私たちの暮らしにおける様々な活動が，水と密接に，また多様に関わり合っていることが理解できます。

世界の水不足の現状

地球上の水資源，特に私たちの生活で利用できる淡水の量には限りがあります。その一方で，人口増加と都市化により水使用量が急激に増加した結果，世界中で水不足を招いています。

ここで一口に水不足と言っても，さまざまな原因があります。アフリカやアジアの乾燥地帯に見られるように，気候的・地理的理由から水資源の絶対量が不足している地域の水問題は特に深刻で，国連開発計画 (UNDP) の調査によれば，2025年には世界の約50カ国で水が不足すると予想されています。また，これまで比較的豊富な水があった地域においても，たとえば急激な人口増加と経済発展が著しい大都市などでは，これまで使えた川や地下水などの水質が悪化し利用できなくなることで，水不足に転じたケースなどがあります。その他にも，日本ではあまりなじみがありませんが，複数の国をまたいで流れる国際河川における上下流国での水の奪い合いによる水不足が，メコン川，インダス川，ガンジス川，チグリス・ユーフラテス川，ヨルダン川流域などで生じています。

これら以外にも、地球温暖化に伴う気候変化の影響により、これまで水不足と無縁であった地域で新たな水問題が生じるなど、世界の水不足は今後ますます深刻になるという予測が多くの研究機関により示されています。

水の大量輸入国である日本

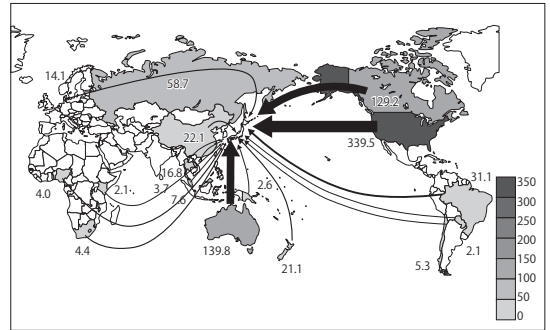
コンビニやスーパーに並ぶ外国ブランドのボトル水。日本ミネラルウォーター協会の調査によれば、日本人ひとり当たり、年間約4ℓのボトル水を海外から輸入している計算になるそうです。これは目に見える輸入した水ですが、この量を遥かに上回る目に見えない海外の水（以後、「バーチャルウォーター」と呼ぶ）に日本は依存しています。

バーチャルウォーター（仮想水）とは、輸入している農畜産物を生産するために必要な水を指します。専門家の計算によると、たとえば牛肉1kgを生産するのに、一般家庭風呂の100杯分に相当する約20,000ℓの水が、またパイナップル1個にはお風呂4杯分の約800ℓの水が必要とのことです。

よって、農畜産物の多くを海外から輸入している日本は、これら農畜産物を通して外国の水を大量に輸入し、国内で消費していることとなります。

環境省とNPO法人日本水フォーラムが行った調査によると、2005年にバーチャルウォーターとして輸入された水は約800億 m^3 と推定されています。これは日本国内で使用される生活用水、工業用水、農業用水をすべて合わせた年間総使用量とほぼ同程度に匹敵するそうです。

この夏にロシアや周辺諸国を干ばつが襲い、各国政府が穀物の輸出を制限した結果、日本の食卓にも影響が出たのは記憶に新しいと思います。このように、私たちは海外の農畜産物、すなわち海外の「水」に依存して暮らしており、海外での水不足・水問題は決して日本と無関係ではないことがわかります。



2005年バーチャルウォーター輸入量

(出典：環境省ホームページ)

私たちにできること

最後に、私たちの日々の暮らしのなかで、世界の水不足解消に貢献できることをいくつかご紹介いたします。

まずは日頃から節水を心がけること。大量消費型社会から自然循環型社会への転換が求められるなかでは、たとえば江戸時代の暮らしの知恵などを生かしながら、水を使い過ぎない、汚さない、再利用するなどの努力の積み重ねが大切です。

また「地産地消」の概念が提唱するように、食べ物も飲み水も自分の住む周辺地域で調達することが、水やエネルギーの面で大きな地球環境への貢献になることでしょう。

そして、食事は残さず食べること。日本の食料自給率を考えれば海外への依存はやむを得ないとしても、食べ物を残して捨てることは、輸入した水を捨てることと同じです。

こうした日本人の日々の意識の積み重ねで培われた水に対する社会規範、またそのなかで蓄積された水に関わる様々な技術や制度は、きっと、未来の世界の水不足の解消にも役立つものと信じています。